

## 『聖般若波羅蜜多心經註釈』

### 凡例

- ・ 『般若心經』の中のお言葉にはアンダーラインを付した。
- ・ [ ] は加筆部分、( ) は説明である。

サンスクリット語で「アーリヤ・プラジュニヤー・パーラミター・フリダヤ・ヴィヤーキヤー」  
チベット語で「パクパ・シェーラプキ・パロルトウ・チンペー・ニンポー・ナムパル・シェーパ」  
(『聖般若波羅蜜多の心髄の註釈』)

仏母般若波羅蜜多に礼拝いたします

ここで「仏母般若波羅蜜多の心髄」(チョム・デン・デーマ・パロルトウ・チンペー・ニンポ)とは、[この論書の元となる] 経典の内容について述べられているのであり、故に[この経典は]『仏母般若波羅蜜多心經』と呼ばれる。最初に名前を述べないとどの経典のことか確定できないので、まず経典の名前を述べているのである。名前を述べただけでなく、『般若波羅蜜多心經』というこの経典内容のすべてには、ここに集約されていないものは何もないので、経典の中の経典であると言われている。

ここで「チョム」(克服する、断滅する)とは、四魔(五蘊・煩惱・死・天人の子)を克服することを意味する。五蘊という悪魔など、般若波羅蜜多の意味によって魔を探しても見つからず、すべての魔は存続することがないので、「[四魔を]克服する」と言われている。

「デン」(具有する、持つ)とは、6つの善きもの(四魔と二障を克服した6つの善き資質)を具えていることを意味する。一切智という功德のすべても、般若波羅蜜多の加持によって生じたものなので、6つの善き資質を具えているからである。

「デー」(超越する)とは不住涅槃のことであり、般若波羅蜜多の意味により、心、意、識の[汚れを]すべて浄化し、すべての習気から離れているので「デー」と言われる。

「マ」(母)とは、過去・現在・未来の三世の仏陀たちも般若波羅蜜多の意味を实践されたことから生じ、般若波羅蜜多の意味によって生まれたので、般若波羅蜜多はすべての仏陀たちの母であるため、「マ」(母)と言われる。

「シェーラプ」(般若、智慧)とは、聞・思・修から生じる三種の智慧のことであり、これらの智慧によって真実をあるがままに知ることができるため、「般若(智慧)」と言われる。

「パロル・ドゥ・チンパ」(波羅蜜多、彼岸に至る)とは、智慧によってどのような現象にもその[実体]を見ることがないので、相(特徴)、二つの極端(二辺)、生と死を超越しているため、「波羅蜜多(彼岸に至る)」と言われる。

「ニンポ」(心髄)とは、『十万頌般若』などの中でも深遠で最勝なる経典は少なく、この短い経典に入っていないものはないので、「心髄」と言われる。

「仏母般若波羅蜜多に礼拝いたします」とは、『十万頌般若』にも「般若波羅蜜多に礼拝するならば、三世の仏陀すべてに礼拝することと同様である」と述べられているので、福德の資糧を積んで供養するために礼拝しているのである。

そこでこのテキストでは、般若波羅蜜多(完成された智慧)についての始めから終わりまでの解説を7つに分類し、その内容が明らかに示されている。それらは何かという、①序文(前置き)、②智慧[の实践]に入ることの意味、③空の相、④智慧の対象、⑤智慧の功德、⑥智慧の結果、⑦智慧の真言(陀羅尼)である。

① 序文は「このように私は聞いた」というところから「[菩薩の大僧伽(菩薩摩訶薩)]とともに座っておられた」というところまでである。

- ② 「智慧〔の實踐〕に入ることの意味」については、「五蘊もまた、その自性による成立がない空という本質を持つものであることを正しく見極めるべきである」〈**照見五蘊皆空**〉というところまでである。
- ③ 「空の相」については、「〔果を〕得ることもなく、得ないということもない」〈**無苦集滅道無智亦無得**〉というところまでである。
- ④ 「智慧の対象」については、「〔悟りという果を〕得ることもなく、〔菩薩たちは〕般若波羅蜜を抛りどころとしてとどまり実践されるのである」〈**以無所得故 菩提薩埵 依般若波羅蜜多故**〉というところまでである。
- ⑤ 「智慧の功德」については、「涅槃を極められたのである」〈**究竟涅槃**〉」というところまでである。
- ⑥ 「智慧の結果」については、「無上正等覺を達成して仏陀となられたのである」〈**得阿耨多羅三藐三菩提**〉」というところまでである。
- ⑦ 「智慧の真言」については、最後の真言までの部分である。

① 次に、序文の意味を説明する。

「このように私は聞いた」とは、大乘の經典はすべて聖文殊菩薩が聞いておられるので、要約すると「私は聞いた」ということである。「このように」とは、智慧の心髄である『般若心経』の経文の意味をあるがままに述べられた、ということである。「私は聞いた」とは、世尊の足元で聞いたのであり、吉祥なる法の歌として説かれたことを直接耳で聞いたということである。

「ある時」とは、智慧の心髄について述べられた『般若心経』は、他の時に説かれたことはなく、世尊は王舎城（ラージギール）に集まった弟子たちに向けて一回だけしか説かれなかったのであり、その時のことを意味している。

「世尊」とは、ここで師とは誰のことなのか、場所はどこなのか、周りに集まった人々は誰なのか、集まってどんなことをされたのかと言うと、「師」とは釈迦牟尼仏陀（世尊）のことであり、場所は王舎城（ラージギール）にある靈鷲山の上で、集まった人々とは比丘の大僧伽（大比丘衆）と菩薩の大僧伽（諸菩薩摩訶薩衆）のことである。集まってどんなことをされたのかと言うと、『般若波羅蜜多心経』について説かれたのであり、そこで經典の意味について解説されたのは前に述べたことと同様である。

「王舎城（ラージギール）にある靈鷲山で」とは、国王〔ビンビサーラ〕は徳が高いことで広く知られており、その地方の都市には一般的な名前がつけられている。「靈鷲山」と言われている地方は広大で、靈鷲山の上には鷲がたくさん集まるのでその名がつけられた。

「比丘の大僧伽」（大比丘衆）とは、大きな力を持つ大勢の集まりのことである。「菩薩の大僧伽」（諸菩薩摩訶薩衆）とは、般若波羅蜜多の卓越した意味を直観で理解しているすべての聖者の菩薩たちのことであり、他にも、般若波羅蜜多〔の修行〕に入った多くの菩薩たちのことを意味する。「他の者たちに囲まれてとともに座られて」とは、世尊が多くの弟子たちに囲まれて同じように座られていたということである。ここまでが、①序文（前置き）である。

② ここで、智慧〔の實踐〕に入るということの意味について説明する。

「その時、世尊は様々な現象について、深遠なる現れ（甚深顕現）と呼ばれる法門の安定した三昧（等引）に入られた」と言われているのは、ここで世尊は、周りに座っている弟子たちと一切有情に対する慈悲の心を起こされ、加持を与えられるために三昧に入られたのである。

「様々な現象についての深遠なる現れ」とは、法（現象）について説かれたこのテキストによって、一切の現象はすべての対象と限界を超越していることを説き示し見抜かれたので、深遠なる現れ（甚深顕現）と呼ばれる。「安定した三昧（等引）に入られた」とは、深遠なる真如についての安定した三昧に入られたということである。

「さらにこの時、菩薩摩訶薩（偉大な聖者の菩薩）聖觀自在菩薩は、般若波羅蜜多の深遠なる實踐の本質を完全に理解して、五蘊すべての本質もまた、自性が空であると見極められたのである」〈**觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空**〉

とされている。「さらにその時」とは、周りの弟子たちが集まって世尊が三昧に入られた時のことである。

「聖観自在菩薩は、その自性が空であると見極められたのである」というところまでの部分では、聖観自在菩薩には、周りの弟子たちと一切有情に対する慈悲の心があるため、般若波羅蜜多の深遠なる本質を完全に理解して、五蘊のすべてでもまた対象がないという自性を持ち、空以外の他のものになることは決してない、という真意を示されたのである。

「五蘊」については、色蘊は飛沫のようなものである。受蘊は水泡のようなものである。想蘊は陽炎のようなものである。行蘊は芭蕉樹〔の幹の空洞〕のようなものである。識蘊は幻のようなものであると言われており、「自性が空である」とは、五蘊のすべては自性の相（特徴）が空であり、すべての限界を超えていて、無相なので、空という本質（空性）を持つものであるとされている。

「すると、長老シャーリプトラが、世尊の〔加持〕力によって、菩薩摩訶薩聖観自在菩薩にこのようにお尋ねした」とは、偉大な声聞乗の中で智慧が最もすぐれていたシャーリプトラが、如来の加持力によって、聖観自在菩薩に「善男子の誰かが、般若波羅蜜の深遠なる修行を实践したいと望むなら、どのように学ぶべきであろうか」とお尋ねしたということである。

「善男子」とは、大乘の典籍から生まれて如来の息子（菩薩）となった者のことである。「誰か」とは、大乘〔の道〕に入ったどのような人であってもよい。

「般若波羅蜜の修行」とは、般若波羅蜜の修行をすることにより言説を超えた一切の現象の深遠なる真如について実践することである。「実践したいと望むなら、どのように学ぶべきであろうか」とは、般若波羅蜜の意味を实践したいと望むなら、どのようにそれを知り、学ぶべきであろうか、と〔聖観自在菩薩に〕お尋ねしたのである。

「このように問われて、菩薩摩訶薩聖観自在菩薩は長老シャーリプトラにこのように述べられた」のであり、質問の答えを〔観自在菩薩は次のように〕述べられている。

「シャーリプトラよ、般若波羅蜜の深遠なる修行を实践したいと望む善男子、善女人なら誰でも、このようによく考察するべきである」とは、般若波羅蜜の修行を实践したいと望む者たちは以下に説明する意味通りに考察するべきである、と述べられているのである。

つまり、「五蘊もまた、自性が空であることを正しく以下のごとく観ずるべきである」とは、五蘊はみな自性が空であり、相がないので、無始の時より不生であり、現在の時においても存続せず、未来の時においても消滅せず、いついかなる時も生成、存続、消滅することはないので、とどまることがないという言説を超えた自性を持つものであり、〔五蘊は〕空という本質（空性）を持つものである、という意味である。「観ずるべきである」とは、真実があるがままに観ずるべきであり、それ以外の他のものは何も観じてはならない、という意味である。

ここまでが、②智慧に入る〔実践〕についての解説である。

〈舍利子〉

〔甚深四句の法門について〕

③ここで、空の相（特徴）についてその意味を説明する。

「色即是空 空即是色」（色は空である 空もまた色である）とされているが、ここで「〔空もまた〕色である」とは、空の自性を理解せず、錯乱した心で色（物質的存在）を見て妄分別すること、あるいは、世間の言説として〔色という〕名前を与えているのである。

「〔色は〕空である」とは、色（物質的存在）の自性は空であり、過去においても無相なので、対象となるものがないということである。現在と未来の時もまた無相なので、対象となるものはなく、すべての限界も一切の事物も存続することがないため、色は空という本質（空性）を持つものである。

「空もまた色である」とは、空もまた対象がないという自性を持つため、「色である」と言って、言葉によって〔色という〕名前を与えているが、名前を別にすれば、そこには何もとどまるものはないので「空もまた色である」とされている。

「色不異空 空不異色」（色は空と異ならず、空もまた色と異なるものではない）とは、どのような物質的存在も、その本質は言葉では表現できない空という本質を持つものなので、色（物質的存在）を別にして空を探しても何も見つからないため、空は色と別のものではないと述べられている。言葉で表現することのできない空という本質（空性）に対して色（物質的存在）という言葉で名前を与えているのであり、その名前と別個に空は見つからず、どこにも見いだすことができないので、空と色は異なるものではない、とされている。

〈色不異空 空不異色 色即是空 空即是色〉

「同様に、感受作用（受）、識別作用（想）、形成力（行）、認識作用（識）のすべても空である」とは、色（物質的存在）について説明したのと同様に、五蘊の残りの四蘊についてもそれと同様に観ずるべきである、とされている。

〈受想行色亦復如是〉

[甚深八句の法門について]

「シャーリプトラよ、そのように一切の現象もまた空であり、〈是諸法空相〉」という最初の「シャーリプトラよ、」という言葉は、「気を散乱させることなくよく聞きなさい！」と呼びかけているのである。「そのように、一切の現象は空〔という本質を持つもの〈空性〉であり、〕とは、ここで五蘊について説明したように、他のものも同様に、〔目、耳、鼻、舌、体、心という〕六処から〔六境・十八界・十二縁起・四諦・〕一切智の境地に至るまでの出世間の一切の現象もまた、空〔という本質を持つもの〕であると知るべきである、という意味である。

「相というものがなく〈無相〉」（捉える特徴がないこと）とは、虚空には相がないのと同様に、煩惱の相もまた存在せず、完全なる浄化の相もまた存在しないのである。

「生じることもなく、滅することもなく、〈不生不滅〉」とされている「生じる」とは、今生じたものは、以前存在しなかったものが後に存在するようになったということである。「滅する」とは、以前存在していたものが後に存在しなくなるということである。「空性（空という本質を持つもの）」とは、〔実体という一切の〕対象がないことであり、以前より生じたことがないということである。生じたことがなければ、後に消滅することもない。

「汚れがなく、汚れから離れることもなく〈不垢不浄〉」については、「汚れ」とは、すべての意識によって主体と客体として享受されるものである。「空性」とは、意識を超えたものなので汚れがないということである。汚れがないので、「汚れから離れるということもない」。

「減るということも、増えるということもない〈不増不減〉」については、「減る」とは有情のことである。「増える」とは仏陀のことである。「〔増えるということも〕ない」とは、有情と仏陀を探しても見つからないので、減ることも増えることもないのである。

〈舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不浄 不増不減〉

[五蘊に関連させて空を説く]

「そうであるならば、空は色ではない〈是故空中 無色〉」とは、色（物質的存在）は壊れるという相（特徴）を持つものであり、空には相がないため、空は色ではない。

同様に、感受作用とは体験するという相（特徴）を持つものであり、〔空には相がないため、〕

「〔空は〕感受作用（受）ではない」。

〔同様に、〕識別作用とは捉われるという相を持つものであり、〔空には相がないため、〕

「〔空は〕識別作用（想）ではない」。

〔同様に、〕形成力は実際に〔何かを〕形成するという相を持つものであり、〔空には相がないため、〕「〔空は〕形成力（行）ではない」。

〔同様に、〕認識作用（識）とは、個別にそれぞれの特徴を捉える相を持つので、空には見るべき対象がないため、「空は認識作用（識）のすべてではない」。

「すべてではない」とは、五蘊のすべては汚れがあるという相を持つものなので、空には対象がないため、「空は五蘊のすべてではない」。

〈是故空中 無色 無受想行識〉

[六つの感覚器官（六根）とその対象（六境）、つまり十二処に関連させて空を説く]

「〔空は〕眼ではない」とは、眼は見るという相を持つので、空には相がないため、空は眼ではない。

「〔空は〕耳ではない」とは、耳は聞くという相を持つので、空には相がないため、空は耳ではない。

「〔空は〕鼻ではない」とは、鼻は匂いを嗅ぐという相を持つので、空は鼻ではない。

「〔空は〕舌ではない」とは、舌は味を体験するという相を持つので、空は舌ではない。

「〔空は〕身体ではない」とは、身体は触れられるという相を持つので、空は身体ではない。

「〔空は〕意識ではない」とは、意識は違いを調べるという相を持つので、空には相がないため、空は意識ではない。このように六つの感覚器官のすべては維持するという相を持つものなので、空には相がないため、空は六つの感覚器官のすべてではない。

「〔空は〕色（物質的存在）ではない」。物質的存在には色と形という相があるので、空には相がないため、空は物質的存在ではない。

「〔空は〕声（しょう）ではない」。同様に、声には快い音、不快な音という相があるので、空には相がないため、空は声ではない。

「〔空は〕香りではない」。香りには匂いを嗅ぐという相があるので、空には相がないため、空は香りではない。

「〔空は〕味ではない」。味には味わうという相があるので、空には相がないため、空は味ではない。

「〔空は〕触（触れられる対象）ではない」。触れられる対象には柔らかさや粗さという相があるので、空には相がないため、空は触れられる対象ではない。

「〔空は〕諸法（様々な現象）ではない」。諸法には様々な現れという相があるので、空には相がないため、空は諸法ではない。そうであるならば、すべての対象物には対象となる条件という相があるので、空には相がないため、空はすべての対象物ではない。

〈無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法〉

[十八界と六識に関連させて空を説く]

「〔空は〕眼の領域（眼界）ではない」から「意識の領域（眼界）ではない。非感覚的意識の領域（意識界）に至るまでのすべても〔空では〕ない」とは、十八界には苦しみという相があるので、空には相がないため、空は十八界ではない。

〈無眼界 乃至無意識界〉

[十二縁起に関連させて空を説く]

「〔空は〕無明ではない」から「〔空は〕老死（老化と死）ではない」まで、そして「無明が尽きる」から「老死が尽きる」までも〔空では〕ない。無明から老死に至るまでの縁起の十二支は、輪廻への捉われという相を持つので、空には相がないため、「〔空は〕無明から老死まで〔の現象〕ではない」。「無明が尽きる」から「老死が尽きる」までは、完全なる浄化の相なので、空には相がないため、「無明が尽きる」から「老化が尽きる」までも〔空では〕ない。

〈無無明 亦無無明尽 乃至無老死 亦無老死尽〉

[四聖諦に関連させて空を説く]

「〔空は〕苦、苦の因、苦の止滅、苦の止滅に至る修行道でもない」。苦は煩惱という相、苦の因は実質因としての相、苦の止滅は寂靜の相、苦の止滅に至る修行道は智慧の相を持つので、空には相がないため、空は「四聖諦（「四つの聖なる真理」）」ではない。

「〔空は〕智慧ではない」とは、智慧は一切の事物を直接知覚で観ずるという相を持つので、空には相がないため、空は智慧ではない。

「〔空は〕得ることもなく、得ないこともない」。「得ること」とは、無上正等覺（無上の完全なる悟り）を得ることである。「得ないこと」とは、有情は無上正等覺を得ないということである。

る。「「[得ないこと] もない」とは、空の相には無上の悟りもなく、有情も存在しないので、得ることもなく、得ないこともない。言い換えれば、一切の事物はその自性が空であり、空とはこのようなものである、と説かれている。ここまでが、③ 空の相についての説明である。

〈無苦集滅道 無智亦無得〉

④ ここで、智慧の対象についてその意味を説明する。

「シャーリプトラよ、このように菩薩は[悟りという結果を] 得ることがないので、般若波羅蜜を抛りどころにしてとどまり実践して」とは、「[以前] 理解しなかったことを理解したという考えが生じるので、般若波羅蜜を実践する対象さえあれば、空の実践という相は、一切の現象が空の本質を持つものとなる。

〈以無所得故 菩提薩埵 依般若波羅蜜多故〉

「菩薩は[悟りという結果を] 得ることがないので、般若波羅蜜を抛りどころにして実践し、」とは、大乘の実践に入った菩薩たちは、五蘊から一切智の境地に至るまでの何ものも得ることはない知って、どのような現象に対しても、微塵も〔実体を〕観ることなく般若波羅蜜を実践すべきである、と言われている。

一切の現象（諸法）は空であり、とどまることがないという自性を持つものである。しかしそれを知らず、無明に惑わされた心によって〔有情は〕暗闇の中で輪廻の海を巡り、さまよっている。錯乱した心の本質は何かというと、三種の智慧（聞・思・修の三慧）によって分析するならば、心には対象がないので煩惱さえ観ることがなく、完全なる浄化も観ることがなく、五蘊から一切智の境地に至るまで〔の一切〕を観ることはない。空性、無相、不生、不滅なども観ることはない。智慧の本質さえ真理に従って観ることはない。何も観ることがない、ということこそ心の自性であることを観るのである。このように、心の自性を観る者は悟りを観る。誰でもこのように悟りを観る者は、真如によって仏陀を観る。真如によって仏陀を観ることにより、自ら無上正等覚を実現し完全な仏陀となるのである。

ここで、疑問を持つ者が問う。「このように、何も存在しないということだけを説明すると非仏教徒たちは虚無論に陥り、声聞乗の寂靜なる止滅の境地に陥るということはないのだろうか」。答えて言う。「そうはならない。〔実体という〕対象を観ることなく有情利益を行い、無上正等覚に向けて廻向し、六波羅蜜などの〔実体を〕観ることなく実践するのだから、そのような過失が生じることはない」。ここまでが、④ 智慧の対象についての説明である。

⑤ ここで、智慧の功德について述べる。

「心に恐れがなく障りもないので、誤った考え（顛倒）を完全に離れて涅槃に至るのである」と言われているのは、般若波羅蜜の空の意味を聞き、考え、瞑想することまでを恐れることなく〔実践することにより〕、心・意・識、習気のすべてを断ち切るので、心には障りがないと言われている。子供じみた〔凡夫の〕行いをする非仏教徒、声聞乗、独覚乗の実践対象から完全に離れて煩惱障と所知障をすべて断滅し、大いなる涅槃の境地に至る。ここまでが、⑤ 智慧の功德についてである。

〈心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃〉

⑥ ここで、智慧がもたらす結果の意味について説明する。

「三世におわすすべての仏陀たちもまた、般若波羅蜜〔を依り処として〕とどまり、無上正等覚を達成して仏陀となられたのである」

〈三世諸仏 依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提〉

と言われているのは、十方位の世間界から三世におわすすべての仏陀たちも、この深遠なる般若波羅蜜を維持し、読み、読誦し、瞑想し、他者に説くことにより、般若波羅蜜を実践することで無上正等覚を達成し完全なる仏陀となられた、という意味である。三世におわすすべての仏陀たちもまた、般若波羅蜜によって生まれ、般若波羅蜜から生じたのだから、般若波羅蜜はすべての仏陀たちの母となる。ここまでが、⑥ 智慧がもたらす結果についてである。

⑦ ここで、智慧の真言の意味について説明する。

「ゆえに、般若波羅蜜の真言は、大いなる明知の真言であり、無上の真言であり、無比を同等にする真言であり、すべての苦しみをよく鎮める真言である」

〈故知般若波羅蜜多 是大神咒 是大明咒 是無上咒 是無等等咒 能除一切苦  
真実不虛故 説般若波羅蜜多咒 即説咒曰〉

「そこで、般若波羅蜜の真言は真理であり、偽りではない」と言われている。「そこで」とは、前に述べられていることを受けて「そこで」と述べている。「般若波羅蜜の真言は真理であり、偽りではない」とは、般若波羅蜜の意味を知って実践するのが真言〔の誦誦〕であり、世間の一切の現象もまた、無上正等覚という大乘〔の実践〕となるのだから、自分も他者も無上正等覚を得て仏陀となるならば、それは真理であり、偽りではない、と言われている。

「大いなる明知の真言」とは、般若波羅蜜の意味を知る真言であり、執着、怒り、無知、輪廻の苦しみなどは言説を超えた自性のないものであると説かれているので、般若波羅蜜は大いなる明知の真言であると言われている。

「無上なる真言」とは、般若波羅蜜は無上の悟りを成就させるものなので、「無上なる真言」であると言われる。

「無比を同等にする真言」とは、般若波羅蜜は世間の人、声聞、独覚の修行と同等ではないが、それらを一切の仏陀たちの智慧と同等にさせるものなので、無比を同等にする真言と言われる。

「すべての苦しみをよく鎮める真言だと知るべきである」とは、般若波羅蜜を持ち、読み、念誦し、教え通りに心に従事させ、他者に説き示すならば、眼の病などすべての病を癒し、十方位におわす仏陀たち、天人、ナーガ（龍）などによって守護され、般若波羅蜜を実践することで悪趣や輪廻の大海すべてを克服することができるので、すべての苦しみをよく鎮める真言と呼ばれる。そこで般若波羅蜜の真言を唱える。

タヤター・ガテー・ガテー・パーラガテー・パーラサムガテー・ボーディスヴァーハー

「すなわち、〔資糧道に〕行け、〔加行道に〕行け、〔見道に〕行け、〔修道に〕行け、〔無学道に至って〕悟りを成就せよ」

〈掲帝 掲帝 般羅掲帝 般羅僧掲帝 菩提僧莎訶〉

という般若波羅蜜のこの真言は、一切の深遠で最勝なる意味を要約し、自然に成就させるものなので、加持を与える真言であると言われている。

「シャーリプトラよ、菩薩摩訶薩（偉大なる聖者の菩薩）は、このように深遠なる般若波羅蜜の実践をするべきである」とは、三世におわすすべての仏陀たちも、般若波羅蜜を実践することによって仏陀となられたのだから、大乘〔の実践〕に入った菩薩たちもまた、般若波羅蜜の実践をするべきである、と言われている。「すると世尊は三昧から立ち上がられて」とは、世尊が深遠なる三昧に入られた力により、シャーリプトラが質問をして、聖観自在菩薩が説明され、その意味が完結した時に世尊は三昧から立ち上がられたのである。

「そこで、〕菩薩摩訶薩聖観自在菩薩に「善く言った!」と〔世尊が〕加持を与えられたのであり、「善く言った、善く言った!」とは、〔聖観自在菩薩が〕般若波羅蜜多の心髄の意味を述べたことに対してであり、それが一切の仏陀たちのお言葉と一致しており、誤りがないので、「善く言った」と礼讃されたのである。

「善男子よ、その通りである! 善男子よ、その通りであり、あなたが深遠なる般若波羅蜜について説いた通りに実践するべきである」とは、聖観自在菩薩がこのように述べられたことが、すべての仏陀たちが説かれたことと一致していたので、「その通りである」と言われたのである。聖観自在菩薩が深遠なる般若波羅蜜を説き示されたその通りに、大乘に入った菩薩たちもまた同様に実践するべきである、と言われているのである。

「如来たちも続いて随喜されている」とは、聖観自在菩薩が説明されたことに対して、如来たちもそれに続いて随喜されたので、他の者たちも疑いなく「それについて言うことなど何があるのか！」と称えたのである。

「世尊は喜ばれ、このように述べられたので」とは、般若波羅蜜について説かれたことにより、周りのすべての者たちも般若波羅蜜の意味を悟り、大乘に対する障りがないので、喜ばれてこのように述べられたのである。「長老シャーリプトラと聖観自在菩薩と、天人、人間、阿修羅、食香（ガンダルヴァ）など周りのすべての者たちが世尊のお言葉を大いに喜んだのである」。

阿闍梨ジュニャーナミトラが記された『仏母般若波羅蜜多心経註』がここに完結した。

日本語試訳 マリア・リンチェン/2018年10月

般若波羅蜜多心経 唐三蔵法師玄奘訳

観自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。舍利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。是故空中。無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色声香味触法。無眼界。乃至無意識界。無無明亦無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顛倒夢想。究竟涅槃。三世諸仏。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。故知般若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。は無上呪。は無等等呪。能除一切苦。真実不虛故。説般若波羅蜜多呪。

即説呪曰

羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶

般若波羅蜜多心経

## 大本『般若心経』和訳

サンスクリット語で、『バガヴァティー・プラジュニャー・パーラミター・フリダヤ』  
チベット語で、『チョムデン・デーマ・シェーラプキ・パロルトウ・チンペー・ニンポ』  
〈『仏母般若波羅蜜多の心髄』〉

仏母般若波羅蜜多に礼拝いたします

このように私は聞いた。ある時、世尊（釈尊）は王舎城（ラージギール）の靈鷲山において、比丘の大僧伽（大比丘衆）と菩薩の大僧伽（諸菩薩摩訶薩衆）とともに坐っておられた。その時世尊は、深遠なる現われ（甚深顕現）という多くの現象についての三昧にお入りになったのである。

またその時、菩薩摩訶薩（偉大な聖者の菩薩）聖観自在菩薩が〔世尊の加持を受けて〕深遠なる般若波羅蜜の行をよく観じ、五蘊もまた、その自性による成立がない空の本質を持つものであるということを見極められた。

〈観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空（度一切苦厄）〉

すると、仏陀の〔加持〕力によって、長老シャーリプトラ尊者（舍利弗尊者）が菩薩摩訶薩聖観自在菩薩にこうお尋ねした。「善男子（大乘の気質が覚醒した者）の誰かが、般若波羅蜜の深遠なる行を実践したいと望むならば、どのように学ぶべきであろうか」

そのように問われて、菩薩摩訶薩聖観自在菩薩は長老シャーリプトラ尊者にこう答えられた。

「シャーリプトラよ、深遠なる般若波羅蜜の行を實踐したいと望む善男子、善女人は誰でも、このようによく見極めるべきである。つまり、五蘊もまた、その自性による成立がない空の本質を持つものであるということ、正しく以下の如く見極めなければならない」

〈舍利子〉

色即是空 （色〈＝物質的存在〉は空である）

空即是色 （空は色である）

色不異空 （色は空と異ならず）

空不異色 （空も色と異なるものではない）

〈色不異空 空不異色 色即是空 空即是色〉

同様に、感受作用（受）、識別作用（想）、形成力（行）、認識作用（識）も空である。

〈受想行色亦復如是〉

シャーリプトラよ、そのように、すべての現象は空である。すなわち相というものがなく、生じたということもなく、滅したということもなく、汚れていることもなく、汚れから離れているということもなく、滅するということなく、増えるということもないのである。

〈舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不増不減〉

シャーリプトラよ、故に、空においては、物質的な存在（色）がなく、感受作用（受）がなく、識別作用（想）がなく、形成力（行）がなく、認識作用（識）もない。 （五蘊）

〈是故空中 無色 無受想行識〉

眼もなく、耳もなく、鼻もなく、舌もなく、からだもなく、心もなく、 （六根）  
形もなく、音もなく、香もなく、味もなく、触れられる対象もなく、〔心の対象となる〕現象もない。 （六境）

〈無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法〉

眼の領域（眼界）から意識の領域（意界）に至るまで、さらに非感覺的意識の領域（意識界）に至るまで〔のすべて〕もない。 (六識)

〈無眼界 乃至無意識界〉

無明もなく、無明が尽きることもない。これより、老死もなく、老死が尽きることに至るまで〔のすべて〕もない。 (十二縁起)

〈無無明 亦無無明尽 乃至無老死 亦無老死尽〉

同様に、苦しみも、苦しみの因も、苦しみの止滅も、苦しみの止滅に至る道もない。 (四諦)  
智慧もなく、〔果を〕得ることもなく、得ないということもない。

〈無苦集滅道 無智亦無得〉

シャーリプトラよ、そこで〔悟りという果を〕得ることがないため、菩薩たちは般若波羅蜜を抛りどころにして住するのであり、心には障りがないため、恐れもない。誤った心（顛倒）を完全に離れて、涅槃に至るのである。

〈以無所得故 菩提薩埵 依般若波羅蜜多故 心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖  
遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃〉

三世におおすすべての仏陀たちもまた、般若波羅蜜を抛りどころとして、無上の完全なる悟り（無上正等覺）を達成して仏陀となられたのである。

〈三世諸仏 依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提〉

故に、般若波羅蜜の真言は、大いなる明智の真言であり、無上の真言であり、無比を同等にする真言であり、すべての苦をよく鎮める真言である。〔これは〕偽りではないので、真実であると知るべきである。そこで般若波羅蜜の真言をこのように説く。

〈故知般若波羅蜜多 是大神咒 是大明咒 是無上咒 是無等等咒 能除一切苦 真実不虛故  
説般若波羅蜜多咒 即説咒曰〉

タヤター・ガテー・ガテー・パーラガテー・パーラサムガテー・ボーディスヴァーハー  
すなわち、行け、行け、彼岸に行け、彼岸に正しく行け、さとりを成就せよ

〈揭帝 揭帝 般羅揭帝 般羅僧揭帝 菩提僧莎訶〉

シャーリプトラよ、菩薩摩訶薩はこのように深遠なる般若波羅蜜を学ぶべきである。」「〔聖觀自在菩薩がこのように答えられると、〕その時世尊は三昧から立ち上がられて、菩薩摩訶薩聖觀自在菩薩に「善く言った」と述べられて、「善く言った、善く言った、善男子よ、その通りである。善男子よ、その通りであり、汝が示した通りに、深遠なる般若波羅蜜を行じるべきである。如来たちも心から随喜されている」

世尊がこのように言われたので、長老シャーリプトラ、菩薩摩訶薩聖觀自在菩薩、まわりのすべての者たちと、天人、人、阿修羅、乾闥婆（食香、ガンダルヴァ）などの世間の者たちが随喜して、世尊のお言葉を讃えたのである。

日本語訳 マリア・リンチェン / 2018年10月改訂版